

2014. 11. 18 (火)

友だち、この微妙な存在

関根康正

打樋先生から「友だち」ということで話すように言われてから、今日まで非常に悩んできました。というのは、友だちというテーマは考え出すときりがなくて、昨日の晩も結構考えたのですが、結局あまりよくまとまりませんでした。

ということで、今日はまとまりのない話になると思いますが、了承してください。私は、今ご紹介いただいたように、文化人類学という学問をやっていますが、正直言って今まで友だちということを含んだ問題は考えてきたと思いますが、それだけを取り出して真正面から考えたことは実はありません。この機会に考えてみようと思いましたが、なぜか私の頭にまず浮かんできたのが、インドの村などで調査経験を踏まえた親族組織のことでした。少しそれについて説明してから友だちのことに話をつなげたいと思います。

姻族のような友だち

インドの村人にとって、いやインド人にとって、親族関係というのがとても重要です。大まかな話だけします。親族というのは2つのまとまりから構成されています。まず一つは、生まれによって血がつながっている、というか、そうみなされる人々のまとまりで

ある血族であり、もう一つは、結婚を通じてつながりを持った人々である姻族です。姻族は結婚によって結び付く人々ですから、もともとは他人です。血がつながっていないのです。それに比べたとき、今、私たちの日本社会ではあまり親戚とかは重要ではなくなってきました。特に都会に住んでいると、余計にそういうことだと思います。それはともかくとして、改めて、姻族とか姻戚とかというのは、いったい何だろうかなと考えます。急いで私の考えを言いますと、姻族は、他人だったけれど、もはや他人ではないということです。血族がもともとの身内だとすると、姻族は身内になった他人と言えましょう。そういう何か中途半端な不思議と言えば不思議な存在です。もっと強く言いますと、味方と敵の間の存在というか、敵でもあり味方でもあるという摩訶不思議な存在です。

だからなのでしょうが、インドの村人の生活を見ていますと、多分、日本でも伝統的な社会ではそうだったと思いますが、姻族とどのように付き合っていくか、それをどうやりくりしていくかということに、日々ものすごく気を遣っていることが分かります。カースト社会と言われるから、カースト関係に気を多く使っているのかと初め思っていたのですが、長く付き合い観察していましたが、それ

よりも、村人は日常的には親族関係、特に姻族関係の維持に本当に多大な努力を傾けているのです。そういう社会から現代日本の私たちはだいぶ離れてきていますので、その感じがわかりにくいかもしれませんが。

そこまで考えて、この姻族の在り方の視点から友だちというものを考え直せるのではないかと思ったわけです。言うまでもありませんが、友だちというのは、他人です（「親が友だち」とかいう類の話は、今少しおいておきます）。しかし、他人なんだけれど、なにかの具合で自分の近くに来て、仲良くなった存在です。ですから、姻族の類推からして、ある意味では友だちも非常に中途半端な存在だと言えましょう。自分ではない他人ですけども、自分に近い存在になったのです。要するに簡単に言いますと、「近い他人」です。この友だちという近い他人とは、姻戚のイメージも重ね合わせて考えると、多分こんな感じになるかなと思います。私たちの実際というのは、私というか、自分というのは、自分だけだと分からなくなってしまいます。そこで、「自分ではないもの」つまり他者との関わりを持つことによって、そこで基本的に自分と自分でないものとの比較を、いろいろな形でしているのでしょう。そうすることで、自分というものを確かめたり、さらに自分というものを新たに構築しているのではないのでしょうか。

息をして生きている私

そのことは英語の概念でも確認できます。私たち一人一人が私であるというのはアイデンティティというわけですけども、アイデンティティというのは名詞ですから固定的な

イメージがどうしてもあります。しかし、私たち一人一人の本当の姿はそのように固定的なものではなく、むしろアイデンティフィケーションという動詞的表現の方がふさわしいと思われまふ。アイデンティフィケーションというのは「同一化すること」という動きのある言葉です。ここでのポイントは、同一化というのは、同じものに同一化できないという点です。同じものが同じものに同一化しても、変化がないのですから言葉の意味が実現できません。それは何も起こっていないということです。ということは、アイデンティフィケーションというのは自分が自分でないものになる、つまり他なるものを自分に取り込む、ということの意味するわけです。そうすることによって新たな自分が構築される、これは不思議と言えば不思議です。これが自分と自分でないものとの不思議な関係です。私たちというのは、自分が自分であると一応思っているのでしょうけれども、よく考えると、常に他者を取り込んで、他になることで自分になっている存在というのが実際です。そこに、自分というものは他者かもしれないというダイナミズムが感じられるでしょう。

このような人間が生きているというダイナミズムは、人間が自分自身の在り方を再帰的に反芻しているところにも見えてとれます。これは哲学で言うところの現存在ですね。自分は一体何をしているかと自分に問いかけている存在者であることが人間の特徴だということです。人間は面倒くさいですね。私はペットの猫を飼っているのですが、猫はそういうことを持続的に考えている風にはどうも見えませんが、人間はどうも自己が自己として充足できない不安定さを抱え込んでいるようです。そのずれたところに、他者を自分の中

に取り込んで自分を作る運動が生まれるようです。抽象的に聞こえる話かもしれませんが、具象的な事象でも説明できます。たとえば、インドの古典籍の中に、ヒンドゥー教神話を多く含むプラーナ文献というのがありますが、そのプラーナというサンスクリット語は呼吸、を意味し、さらには生命力そのものをさしています。実際、私たちは常に息をしているわけです。息しないと死んでしまうのですから、生きていくということは、息をしているということではじめて成り立つわけです。息をするとは、自分の外の空気を吸うということです。外の空気を自分の中に取り込んで生きていくわけです。先ほど話したアイデンティフィケーションと同じ原理ですね。

私の内外をつなぐ文化装置、あるいは「相応の他者」

息をしているという基本的事実、物を食べるという行為にすぐ延長できますが、それだけでなく様々な文化装置にも同じ原理が働いています。すでに分厚い文化装置という保護膜に囲われて生きていく私たちですから、もし野生の自然の中に放り出されたら、自分で保護膜を作る能力が低下しているので非常に困難ことになるでしょう。私たちはすでに丁寧に料理したものしか食べられないという身体になっているでしょう。文化装置の薄い厚いはあるでしょうが、人間というのは、必ずある料理という過程を踏んでから外の物を口に入れているのです。自分の口に入れられるように吟味し加工するのです。大体、毒を食べたら死ぬのですから当然です。実際、昔は毒キノコを食べて、多くの人が死んだことでしょう。このキノコは食べられるか否かを

選別し、選ばれたものを料理して、口に入れても問題ないところまで加工して食べているわけです。「野生の外」を「馴化した外」にまで変えてから自分に取り込んでいるのです。とにかく、私たちの自己身体が生きていくには、このような外なる他の物を取り込んでいく必要があります。言い換えれば、私は私に閉じていると死んでしまうわけです。息をしなければ、物を食べなければ、生きていけないのです。ですから、無事に取り込めるように加工する過程という文化装置を發明してきたのです。

こうした話をしてきたのは、料理のような加工装置は、友だちという存在と相似ではないかと思ったからです。友だちというのは、近い他人ではないかと最初に言いました。全くの他人というのと違うわけです。全くの他人だと、相手が何者かわからないのですからなかなか対話はできません。しかし、何かの具合で近い他人として付き合えるようになると、一緒にいる時間も長くなる。その時間共有の中でいろいろな経験も一緒にして信頼も情愛も育まれる。ここまでくれば、友だちは自分にとってすべてということはないが、咀嚼可能な理解可能な存在になっている。だから、そういう友だちの言葉とか行動なんかを見習ったり、学んだりして自分に取り込むことができるようになる。これがまさに実際のアイデンティフィケーションの姿なのでしょう。

つまり何が言いたいかと言いますと、私は最近、「相応の他者」という言葉を思いついて、それについて考えているのですが、相応の他者というのは、適当な距離というか、付き合い可能な度合いになった他者です。つまり、付き合いには厳しすぎる全くの野生の他

者ではなくて、咀嚼可能な程度に柔らかくなった優しい他者です。例えば、もし私が急にマイナス 30 度の空気を直接吸ったら、私の身体はショックを起こすでしょう。今、この部屋は 20 度ぐらいでしょうか、これは私には適度な温度です。適度な温度だから、ここの空気はスッと私の身体に入ってきて私を生かしています。そういう少し優しくなった他者、相応の他者という仕掛けが、私たちの周りには、ふつうは気付かないけれど、ちゃんと用意されているから無事に生きていられるのでしょう。この部屋の場合空調によって身体の内外をつなぐ適温の空気を作っています。それと同じように、はじめに話したインドの村人たちは姻族という、身内としての血族の内外をつなぐ両価的な文化装置（もちろん、私たちの伝統社会にも実はあったのですが）、を發明してきたのです。そういう姻族という存在は、血族だけで閉じていたらだんだんその村は駄目になってしまう（死んでしまう）ことを避けるための自己開放装置になっているのです。新しい他者を取り込んでこそ、村が繁栄していきます。村人にとっての自己開放装置は姻族だけでなくもちろんいろいろものがあって、そうした集散的に發明された仕掛けに従って生きていくと、大体元気に生きていけるようになっていくのです。限られた時間の中ですが、友だちを考えるときの原理的な話をしてきました。

友だちは、私を受け止め世界を開く

その上で、少し具体的に私自身の友だち経験のことお話ししましょう。私の友だちというのは誰だろうかまず思うのですが、どうも友だちは生活している場所が変わればやはり

変わっていきます。子供のころからずっと続いている友だちもいますけれども、私の場合は多くありません。だから私の友だちは変わってきたのです。私の場合、職場は大学ですが、いくつも大学を変わってきた経験では、それぞれの赴任した大学で、場を共有しそこで近くなる人が出てきます。そして私が次の大学に異動すると、縁遠くになってしまう人もいますし、ある意味でそういうのは当たり前なのではないかと思っています。物理的近さや顔が見えることは友だちができる強い条件でしょうから、そういうことがある時期強く深く共有されるとその近しさは友だち関係の基盤になって長く持続するのでしょう。小学生や中学生の頃の友だちの中に数名は今も友だち関係が持続しているのはそういう理由でしょう。

今回いろいろ考えさせられて、友だちというのは、良い題だなと気づいたのです。というのは、打樋先生が考えられたのでしょうかけれども、友人という題だったら字面からですが人間だけになってしまいます。友だちという題だから、人間でなくてもいいのだという示唆を受けたのです。そう思えば、人間に限らないいろいろな友だちがいます。

私など、今、ペットの猫が友だちです。帰ると玄関で猫が待っていると、それだけでうれしくなります。うちの猫は人にまとわりついて面倒くさいのですけれども、それも含めて可愛いんです。猫は顔の表情がないですが、その全身での表情があるのです。病気の時は全身で元気がないと言っています。しゃべらないから何を考えているか分からないのですが、それではコミュニケーションはないのかと言いますと、コミュニケーションはあるのです。すれ違いながらも、このよくわか

らないけれど愛着があって何がしかは通じ合う、そういう曖昧な関係の持続が友だちにはあるのでしょう。

急に話が変わりますが、すこし子どもの頃のことを考えてみたいと思います。以前、私は原風景ということの研究したことがあって、大方は子どもの時に遊んだ場所が原風景の中心にしっかりあることを知りました。懐かしい風景です。私にもそういう場所があり、それはやはり子どもの頃、毎日遊んだ所です。近所の子どもたちとみんなで遊んだ場所です。ピワの木にはよく登ったし、なかなか登りにくいヒマラヤスギにもトライしました。よく穴を掘って地下の家だとかと言って喜んでいました。掘り終わった瞬間に落盤したこともありました。そうした触覚的な光景は今もありありと覚えています。こうなると、土とか木も友だちかもしれないなんて思ったりします。私の心の中にあるあのピワの木は特別で、もうほとんど毎日登っていた木ですから、ただの木ではありません。そうなると、木でも石でもなんでも、動物でも植物でも無機物でも、ずっと付き合っていると、友だちになりうると思えてきます。いったい友だちって何でしょうか。だんだんわかってきたような、逆によく分からなくなってきたような感じですが。

友だちって、広く考えて、たぶん他者であるのに自分を受け止めてくれる存在、そんな気がしてきます。

そういう風に言って、思い出されることに、本当に話があちこち行くのですが、あの有名なヴィクトール・フランクルの『夜と霧』の一節です。ユダヤ人のフランクルは、想像を絶する過酷な強制収容所の境遇から医

者だったこともあるでしょうが生還して、あの本を書きました。若いころに読んだのですが、忘れられない一節があるのです。同じ強制収容所にいたユダヤ人の少女についての話です。その少女は収容所の小さい窓から見える一本のカスタニエンの木に気づきます。それ以来、毎日毎日、その少女は収容所の外の世界にある、その木を見るのです。そのカスタニエンの木とその少女は対話を続けます。そうなってくると、その木はただの木ではなくて少女の友だち、いや親友です。その木の存在を通じて少女は世界とつながるのです。その木と対面することがそのまま彼女の生きることなのです。その木は媒介者、収容所の内外、彼女の内外をつなぐ大事な友だちになったのです。そういうことを思い出したりしていました。

終わりの時間が来ました。やはり何か友だちというのは難しいテーマで、はっきりしたことが言えません。今日の話には結論などないのですけれども、ひとつ言えそうなことは、こうです。友だちというのは、私ではない他者ですが、いろいろな偶然が重なって、自分の近くに来た人や物や動物や植物と共に時間を過ごして、それが自分を受け止めてくれるという存在になっていくことがありえるということです。そういうことで私たちは生きていけるのかなと思ったりもします。友だちは必ずしも人間である必要はないのです。

私はキリスト者ではないので、聖書でどういうことになっているかは分かりませんが、ひとまず私の経験からはこのようなことを考えました。

(社会学部教授)